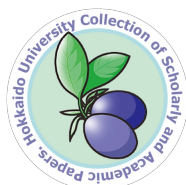




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マックス・ヴェーバー著、戸田聡訳『宗教社会学論集』（第1巻・上：緒言／プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神／プロテスタント諸信団と資本主義の精神）北海道大学出版会、2019年
Author(s)	白井，暢明
Citation	基督教學， 55， 18-21
Issue Date	2020-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92824
Type	journal article
File Information	03shirai.pdf



マックス・ヴェーバー著、戸田 聡訳

『宗教社会学論集』(第一巻・上)

緒言／プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神／プロテスタント諸信団と資本主義の精神)(北海道大学出版会、二〇一九年)

白井 暢明

今年、マックス・ヴェーバー没後一〇〇年に当たる。当然ながらこの一世紀の間に世界は大きく変化した。従って、本書の訳者も「あとがき」で述べているように、近代資本主義の成立史をはじめとするヴェーバーの学問的諸テーゼの中には、その限界を見極め、再検討すべき部分が少なからず存在することは当然であろう。しかしその一方で、ヴェーバーの該博な知識に基づく分析や諸テーゼの中には、現代的状況の中での読み替えによって、いまこそ必要な新たな展望を切り開く種子もまた含

まれているのではないだろうか。

『倫理』論文の末尾には次のような有名な一節がある。
「まだ誰も知らない、将来この(精神の抜け落ちた資本主義システムという)鋼鉄のような外枠(ein strahlhathiges Gehäuse)の中に住む者が誰かを。」(抄訳)

近代資本主義システムの本質は、今日でもなお当時ヴェーバーが定義したものと変わってはいない。しかしその外枠は、少なくとも我々現代人にとって、もはや「鋼鉄のようなもの」ではなく、「経済グローバリズム」と「経済成長至上主義」という、一見より「動的」で「ソフト」なものに変貌している。ただ、その不可抗力性、そしてその中身(精神)が完全に抜け落ちていくという状況に変わりはない。ある意味では、その中身(システムの存在意味)を提示してくれる一種の「倫理予言」がいまこそ必要なのではないだろうか。

さて、この記念すべき時期に合わせて昨年出版されたのがこの訳書である。これはマックス・ヴェーバーの宗教社会学論集原著全三巻を訳者個人で全訳しようという企画の第一巻上であり、その中には、「緒言」、「プロテ

スタンティズムの倫理と資本主義の精神」、「プロテスタント諸信団と資本主義の精神」の三つの論文の日本語訳が収められている。

ところで、ヴェーバーのこれらの論文それぞれには、複数の訳者による日本語訳書がすでに存在する。そこで、本訳者はこれをあらためて個人で全訳することの理由と意義について「あとがき」等で述べているが、その要点はほぼ次の二点に集約されると思われる。

第一に、この論文集は、ヴェーバーという同一人物による、同一の分野（宗教社会学）に関する論集であるにもかかわらず、既訳書ではそれぞれの訳者によって文体や訳語等についての統一性がない。従って、単独訳こそがヴェーバーの論述の体系的で一貫した読み取りや解釈に寄与するものであると考えられること。

第二に、翻訳方針として、特に第二論文の既訳書（梶山・大塚訳）に顕著であるような「意訳主義」を排して、「直訳・対語訳主義」を採ることによって、ヴェーバーの論述の「正確な写しとり」を意図すること、である。

第一の点に関しては、一般論として全く異存はない。

問題はその質であろう。そして第二の点、つまり「直訳・対語主義」に関しては、ひとつの考え方として貴重なものではあるが、問題はその結果としての日本語の読みやすさ如何にある。これについては後述したい。

まず、本訳書の意義、そして内容的に高く評価できる点について述べたい。

第一に、質量ともに膨大で、しかもセンテンスが長く難解な文として知られるヴェーバーの論文集を、単独で全訳しようと企画した訳者の意欲に敬意を表したい。なによりもまず、訳者自身が語っているように、一般論としてこの論集の単独訳者による全訳がそれ自体として大きなメリットを持つことは当然である。例えば、訳語や文体の統一性によって、各論文の相互関係や内容的な関連性についての比較検討も一層容易になると思われるからである。

第二に、ヴェーバーの訳書としては初めての試みであるが、原文にはない「小見出し」をつけたことも、読者の理解しやすさや読みやすさの点で高く評価できる。これによって、ヴェーバーの論述のその箇所ごとのテーマ

とその論点の経緯がわかりやすくなっている。

第三に、本訳書の末尾には極めて詳細な索引が付けられている。この索引のお陰で、ヴェーバーが使用した語句の頻度、つまり重要性がわかり、また、同一の原語に対して訳者が異なる訳語を採用した際の適切性を確かめることもできる。

第四に、訳者が旧訳書の通例になっている訳語のいくつかについて、それを変更し、新たな訳語を採用しているが、そのほとんどは適切と思われる。例えばSekteを「ゼクテ」ではなく「信団」と訳したことなどがそれに当たる。

第五に、原文の註にでてくるヴェーバーの引用文献についても、訳者はMWG I/18（近年刊行されたWeber全集で、参考文献の考証も含む）をもとに細かく参照し、ヴェーバーの引用間違いも含めて註でも指摘していることである。

以上の点を総括して言えることは、この全訳の企画からは、訳者の並々ならぬ熱意と徹底性が伝わってくるということであろう。

他方、本訳書の問題点と思われる点について若干の意見を述べたい。評者から見て本訳書の問題点と思われるのは、ところどころにある訳文の日本語としての読みにくさである。これは既に述べられた「直訳・対語訳主義」という訳者の基本方針からしてある程度はやむを得ないとは言え、かなり読みにくい部分が多々見られる。

ドイツ語文をその語順通りに日本語にすることには、両言語の構造的相違からやはり限界があり、その一つは動詞の位置の違いである。例えば、「○○は・・・である」あるいは「○○は・・・する」という日本語の構造では、この「・・・」の部分が長すぎると文のつながりがわかりにくくなる。

本訳ではそれに該当する箇所が多々見られるが、それは、ヴェーバーの原文が関係文等の副文や挿入文（句）が複雑に入り組んでいることと、訳者が原文をできるだけ語順通りに、しかもひとつの文を切らず（分けず）に訳そうとしているからである。しかし、このように動詞が最後に来る日本語のスタイルを採る限り、結果的にはドイツ語原文とは語順が異なることになる（ドイツ語で

は動詞は通常前にある）。また、関係文や副文などをハイフン（―）やカッコでつなげている（入れ子状態になっている）部分が多いことも読みにくさの一因になっていると思われる。

この点は今後検討されるべき課題であろう。また、評者から見て誤訳と思われる部分が複数箇所あったが、その詳細は直接訳者に伝えることにしたい。今後の参考にしていただければ幸いである。

最後に、この意欲的な企画が今後も順調に進み、より十全な形で完成の日を迎えることを祈り、また期待したい。